

「平和を作り出す者」マタイ 5:9 木村一充牧師

今年 2025 年は、敗戦からちょうど 80 年の節目の年です。先週の水曜日（8 月 6 日）の朝、広島平和記念式典をテレビで視聴しました。昨年 12 月にノーベル平和賞を受賞した日本原水爆被爆者団体協議会（被団協）のリーダーの方も式典に参列されていました。

夜の NHK ニュースでは、原爆投下から 80 年の特集として、このリーダーの方が地元のスタジオに招かれ、インタビューを受けていました。その方はこう語ります。「私は現在 81 歳ですが、恐らく 10 年後にはこのような場に出ることはできないでしょう。時の流れとともに、広島原爆体験を語り継ぐ人々が亡くなっていくことを思うと、元気な今のうちに、できる限り核兵器反対の運動を続けていきたい」と。80 年前のあの日の記憶を風化させないために、一人でも多くの人に語り伝えようとするこの方の使命感と決意に、深く心を動かされました。

考えてみれば、明治以降の日本は、1894 年の日清戦争からおよそ 10 年ごとに大きな戦争を経験してきました。しかも、太平洋戦争を始めるまで、日本は敗戦の経験がありませんでした。中学生のころ、歴史の教科書で赤く塗られた日本の地図を見ながら、「これほど領土が広がっていたのに、なぜ日本は戦争をしたのか。第 2 次世界大戦で負けなければ、日本は広い領土を持ち続けることができたのに」と思ったことがあります。より広い領土を持ちたいという偏狭なナショナリズムが、私自身の中にもあったことを告白しなければなりません。しかし、そのような私が、そして恐らく多くの日本人が見逃していたものがあります。それは、戦争の勝利という国家的な栄光の陰に、実に夥しい数の戦争犠牲者がいたという事実です。調べてみると、日清戦争での戦死者は約 1 万 2 千人。日露戦争では約 10 万人に膨れ上がり、太平洋戦争ではなんと約 230 万人にのぼるといいます。この中には、広島・長崎の原爆犠牲者も含まれています。大変な数です。しかし、戦争の犠牲者は当然ながら日本人だけではありません。日本軍によって殺害された中国の一般民衆の数は、一説によると 1,000 万人を超えるとも言われています。このような数字を知るとき、戦争によって自国の利益を拡大しようとする行為が、どれほど罪深いことであるかを思い知らされるのです。

1946 年に公布された日本国憲法では、この戦争の惨禍を二度と繰り返さないために、前文（前置きの文章）で国民主権と民主主義の原理を宣言しています。さらに、第二段落では「平和主義」を高らかに謳っています。前文にはこう記されています。

「日本国民は、恒久の平和を念願し、人間相互の関係を支配する崇高な理想を深く自覚するのであって、平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した。われらは、全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免れ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する。」

この理念を具体的に示したのが憲法第 9 条です。そこでは、日本国民が一切の「交戦権」と「陸海空軍、その他の戦力」を保持しないことが規定されています。近年、この憲法第 9 条の改正がいくつかの政党で議論されています。しかし、平和憲法を持つことは、この国が 80 年前に下した大きな決断でした。その精神を決して失わないように、先ほどの被団協のリーダーの方と同様、私たちも訴え続けていかなければならないと思うのです。

イエス・キリストが「剣によって立つ者は、剣によって滅びる」と教えられた当時、地中海世界に「ローマの平和」を打ち立てたのはローマ帝国でした。イエス・キリストが生まれたころ、皇帝アウグストスによる人口調査の勅令が出されたとルカ福音書に記されていますが、このアウグストスこそ「ローマの平和」を築いた皇帝でした。当時、ローマ人の間で語り継がれていた諺に「平和を欲するなら、戦争の備えをせよ」というものがあります。これは、歴史上多くの国々が自らの支配力を誇示するために受け継いできた教訓でした。

今も世界の多くの国々が、軍事力と経済力を手に入れようと血眼になっています。わが国でも、最近「核武装こそ最も安上がりな防衛手段ではないか」と唱えた人がいたといえます。しかし、それはイエスの教え

「剣を持つ者は剣によって滅びる」に反するのではないのでしょうか。「目には目を、歯には歯を」というルールは、約 4,000 年前のもので、私たちは本当に成長しているのでしょうか。

20 世紀スイスの神学者カール・バルトはこう言います。「もしも戦争を欲しないのなら、平和の備えをせよ」。これは、二度の世界大戦を経験した人類が学んだ教訓ではないのでしょうか。つまり、平和な国づくりこそが、戦争を阻止する世界関係を築くことにつながるのです。

マタイによる福音書 5 章 9 節は、イエスの「山上の説教」と呼ばれる教えの冒頭部分に記される八つの「幸いなるかな」のうちの七番目の言葉です。それまでの六つは、形容詞で修飾された人々（心の貧しい、

柔和な、憐れみ深いなど）が挙げられています。しかし、ここでは初めて「平和を実現する」という動詞で修飾された言葉が登場します。この点は見落としてはならない重要なポイントです。ギリシャ人は「平和」とは戦争や争いのない「時間」だと考えました。一方、ユダヤ人は「平和」とは「神の義（ツェダカ）」や「神の真実（エメト）」が社会に満ちている「状態」だと理解しました。つまり、平和な社会を築くには、神と人間との関係、人間同士の関係が問われるのです。平和とは、外から見て客観的に表現される形容詞ではありません。また、静止しているものでもありません。関係性であるがゆえに、刻一刻と変化し、動いているものなのです。神との関係が壊れると、平和も壊れてしまいます。

平和を維持するには、注意と努力が必要です。それは、家族が平和に過ごすために、家族全員の努力が必要なと同じです。だからこそ、主イエスは「平和を愛する者」ではなく、「平和を実現する者は幸いだ」と語られたのです。では、平和を作り出すために、具体的にどうすればよいのでしょうか。あるスイスの聖書学者（H. ヴェーダー）は次のように述べています。

スイスでは、争う二者の間を仲裁する立場の者を法律用語で「平和創造者」と呼びます。しかし、イエスがここで語っているのは、そうした紛争の仲裁者ではありません。平和を作り出すには、争う当事者自身が、自らの権利を押し通すことを断念しなければならない。さらに、被害者が損害賠償を求めることを断念することによって、平和を築かなければならない。憎まれている者が、自分を憎む者を愛し続けることによって、平和を作り出さなければならない——と彼は言います。

まさに、生前のイエスがなさったような生き方を、私たちも実践するのです。自分の側で痛みを引き受け、敵をも愛すること。それは、十字架につけられたお方の生き方そのものでした。だからこそ、「このような人たちは神の子と呼ばれるだろう」と、9節の後半に記されているのです。

宗教改革者マルチン・ルターも、これに似たことを語っています。「神の国はあなたがたの敵のただ中にあるのだ。そこに生きることに耐えようとせず、友だちの中に留まり、バラやユリに囲まれて座っている者はキリストを裏切る者だ。もしキリストがそのようになさっていたら、一体誰が救われたらだろうか。」

厳しい言葉ですね。確かに私たちは、悪人たちと一緒にいたいとは思いません。できれば、親切で優しい人のそばにいたいと思います。そして、教会こそそのような人々が集まる場所であるべきだと考えます。

しかし、ルターはそれは間違いだと言います。なぜなら、イエスご自身がそうではないと語られているからです。

マタイ福音書 10 章 34 節以下には、次のようなイエスの言葉があります。「わたしが来たのは地上に平和をもたらすためだと思ってはならない。平和ではなく剣をもたらすために来たのだ。わたしは敵対させるために来たのだ。」つまり、本気で神に従うことを決意したならば、その人は神を信じない人々と対立することになる。神を第一にする人は、神を後回しにする人々と関係が悪くならざるを得ない——そう語られているのです。こう考えると、主イエスが教えられた「平和を作り出す」生き方とは、逆説的に言えば「戦う生き方」だったのではないのでしょうか。何との戦いか。それは、何よりも自分自身との戦いです。自分を安全地帯に置き、面倒なことや隣人同士のトラブルを見て見ぬふりをする。反対に、自分に不利益が生じると、相手を非難して自らの権利を主張する。そのような生き方と決別し、すべての人の幸せを願い、すべての人を愛することができるように、神に完全に従う者となりなさい——とイエスは教えておられるのです。

平和を作り出すには、確かに力が必要です。しかし、その力を私たちは自分で生み出すのではなく、神からいただくのです。神が与えてくださる力、神と共に生きるところから与えられる力です。相手の良心を信じて、その人の懐に飛び込む。あるいは「この人は苦手だ」と思う人から離れず、逆に近づいていくことができる力を、神からいただくのです。旧約聖書で「平和」と訳されるヘブライ語「シャローム」は、とても広がりのある言葉です。「シャローム」は、人間に幸せをもたらすすべてのものを指しています。だとすれば、平和を作り出すとは、その人と関わりを持ち、その人が喜んでくれるように振る舞うことです。平和を作り出すとは、その人を気遣い、その人が幸せになるように努めること。つまり、その人を愛することです。それは決して大げさなことではありません。私たちが、自分の置かれた場所で、家族であれ、友人であれ、それほど親しくない人であれ、すべての人に対して思いやりを持って行動すること。その人が幸せになるよう、自分にできる小さなことをすること。それが「シャローム」を作り出すことなのです。

お祈りいたします。